

平成 27 年 6 月 4 日現在

機関番号：10102

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520723

研究課題名(和文) イギリス地域史学研究－文書館・大学・歴史協会と地域史研究の相互関係

研究課題名(英文) English local history : a relation with archives, university and historical society

研究代表者

石井 健 (Ishii, Takeshi)

北海道教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：30303043

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,000,000 円

研究成果の概要(和文)：本研究は、イギリスにおける地域史叙述・研究のあり方を、大学や歴史協会といった地域史研究を支える機関や地域史叙述者との関係の歴史を通して考察するものである。事例として、レスター大学イギリス郷土史学科やレスター考古学歴史学協会を取り上げた。その結果、これらの団体や所属する人々が、その活動を通じて地域史研究の成果を積み上げていくと同時に、その方法と叙述を受容する地元の郷土史家を育てていくという相互関係が解明できた。

研究成果の概要(英文)：How was the English local history or historian supported by such universities and local historical societies in nineteenth and twentieth centuries as the Department of English Local History, University of Leicester, and the Leicestershire Archaeological and Historical Society? Through their activities and transactions, the local historical societies told and showed, and some universities taught, many amateur antiquarians or students their method and achievements of English local history, and tried to bring up to be the local historians, although few of them wrote any local histories.

研究分野：近世イギリス社会経済史

キーワード：地域史 イギリス史 社会史

1. 研究開始当初の背景

研究代表者である石井は、これまで、17世紀のイングランド系アメリカ移民の出自という問題関心から、その出身地に関する地域史研究についていくつかの成果を発表してきた。またその間、一橋大学社会科学古典資料センターに勤務し、西洋古典文献・文書史料の収集管理、史料編纂、図書館・文書館業務に携わってきた。

こうした実務経験と個別実証研究を深めていくに伴い、その方法論的前提である地域史研究そのものの意義やあり方について再検討するの必要を感じた。そこで、同様の問題関心を共有する研究者たちと定期的に会合を持ち、議論を続けてきた。

そもそも日本のイギリス史学においては、研究者が個別実証研究を進める傍らで、折にふれイギリスにおける地域史研究の動向を紹介し、その方法の意義を確認してきた。しかし、地域史の研究・叙述が可能になった諸前提についての考察、すなわち、それら地域史研究・叙述を支えた施設や機関との関係についての歴史については立ち入った考察が行われないままであった。

そこで本研究では、イギリスにおける地域史叙述・研究のあり方を、文書館、大学、歴史協会といった地域史研究を支える機関、地域史の叙述を担った個人・組織・制度との関係の歴史を通して考察することで、地域史研究の方法論を再考し、その意義とさらなる可能性を模索することとした。

2. 研究の目的

本研究は、研究期間内に次の点を明らかにする。すなわち、イギリスの一地域史研究を事例としてとりあげ、その地域史研究の基盤となっている機関・団体・施設等の社会史を調査・分析し、研究や叙述のあり方との関係を明らかにする。

具体的には、第一に、歴史協会や考古学協会が地域史研究・叙述に果たした役割を明らかにする。初期の地域史研究を担ったのはアマチュア郷土史家であり、かれらが集った歴史協会等であった。これら歴史協会等の団体の歴史を明らかにすることで、地域史研究が当初もっていた目的や意義がどのようなものであり、それが現在どのように変容してきたかが明瞭となろう。

第二に、大学や各種研究機関が地域史研究に果たした役割を明らかにする。大学等の高等教育研究機関は地域史研究の担い手であるとともに、地域史研究の担い手を育てる教育機関でもある。とくにその人材育成の機能面から大学等の研究機関の歴史を明らかにすることで、各地域における地域史研究のあり方を浮き彫りにすることができよう。

3. 研究の方法

本研究を遂行するための方法としては、まずはじめに関連史料の調査収集がある。一次

史料はもとより、地域史に関する二次資料も多くはイギリス国内の各種文書館、図書館等に所蔵されていることから、現地に赴いての調査が必要となる。また、近年の史料デジタル化の発達に伴い、インターネットを介して発信されている情報が増大しているので、これについても調査収集が欠かせない。

次に、収集した史料を分析する。とくに個人に関する名寄せが必要な場合には、同一人物であるかどうかを慎重に確定しなければならない。

4. 研究成果

(1) 大学等の研究機関と地域史研究との関係を考察するため、事例としてレスター大学イギリス郷土史学科を取り上げた。この学科は1948年に設置されたイギリスで初めての地域史に関する専門学科である。創設以来、地域史研究と地域史研究者養成を進めてきた。

この機関が地域史研究の発展に果たした役割とその重要性についてはすでに多くの先行研究が明らかにしてきた所であり、本研究においても先行研究を追認するにとどまった。

一方、地域史研究者養成の面については、先行研究がほぼ皆無なため、基本的史実の整理から始め、養成の内実やその成果へと順次進めていった。

(2) イギリス郷土史学科は、著名な地域史研究者 W・G・ホスキンスの提唱によって1948年に創設されたが、学科構想自体は遅くとも1946年秋には存在した。その構想には、現在及び将来の教員に郷土史の方法を学ばせ、学校教育における郷土史授業を促進する狙いがあった。

もっとも、ロンドン大学に從属していた当時のレスター大学では「郷土史」学位の創設が独自にできなかったため、郷土史学科は所属学部生をもたない研究のみの機関として出発することになった。

(3) 次に学科の教育機能が議論の俎上に上ったのは、オックスフォード大学に転出していったホスキンスが再びレスター大学に戻ってきたときだった。彼は学科の機構拡大を図るにあたり、学科に一年制の修士課程を設けようとした。

これは大学院生に地域史研究の方法を習得させるもので、古文書学、史料学、地誌学、建築史学、地域社会経済史といった地域史学に関係する科目の講義と野外での巡検等の演習からなるものであった。カリキュラムに並ぶ科目の多くは、それまでイギリス郷土史学科が研究面で達成してきた内容をふまえたものである。

修士課程は予定通り1966年度から開設され、現在まで多くの修了生を世に送り出している。

(4) 修了生の進路については以下の特徴がある。まず、その後も地域史を専門として博士課程に進学し、研究職を目指したものが一定

数存在する。ただし、かれらのうち常勤職を確保できたものは少数である。

歴史を専門教科とする学校教員となったものや、学芸員や司書、アーキヴィストなどの隣接研究職へ進んだものもみられたが、こちらも少数である。

多数を占めるのは、修了後目立った研究業績を残さない人々である。とはいえ、かれらが地域史と無縁な人生を送っているとはいえない。地元の郷土史協会など研究会や同好会に参加しつつ、会誌に地域史叙述を残さない会員は無数にいるからであり、いわば読者の郷土史家の厚い層を形作っていると言えよう。

(5)次に、地域の歴史協会と地域史研究との関係を考察するため、レスタシア考古学歴史学協会を事例として取り上げた。これは上述のホスキングズやレスター大学イギリス郷土史学科と深い係わりのある学術団体である。

しかし、本邦ではその詳細はあまり知られていないことから、本研究では基礎的史実の確認から、この団体の活動内容や会員構成などを順次明らかにしていった。

(6)レスタシア歴史学考古学協会は1855年に設立された。当初はレスタシア建築学考古学協会を名乗り、一般的な古物研究や資料保存の他、とくに教会建築物の研究と保全や改良の推進を目的としていた。

その後、1920年頃にレスタシア考古学協会、1955年にレスタシア考古学歴史学協会と改称して現在に至っている。名称変更前後して、1951年の会則改正で、教会建築物の改良を進めるといった目的は削除された。

はじめ、会の名称通り、活動の中心は考古学的発掘調査の報告ならびに教区教会建物の現状調査と改良活動の支援であった。年次総会では、遺物資料の展示会を開催したり、州内の歴史的建造物、とくに教区教会建物を中心に巡検したりすることが多かった。

やがて、これに古文獻史料の調査が付け加わるようになり、教区登録簿といった教会史料などの翻刻が会誌に載るようになっていく。

(7)会員は、発足から1910年代まで、ほぼ男性のみで、爵位貴族を含む地主ジェントリーとピーターバラ主教を頂点とする州内教区教会の牧師たち、それに事務弁護士が多数を占め、会の活動と運営の中心を担った。しかし、これらの社会集団に並んで、地元の商人や工場経営者などの商工業者も少なからず会員となっており、その一部はレスター市長、参事会員、市議会議員と重複している。その一方で、労働者階級に属する会員は皆無に等しい。このことから、協会が地域社会のエリート層からなる団体であり、階級的ジェンダー的特質から政治クラブに類似した社交団体であったことがわかる。

しかし、20世紀に入る頃から、女性会員の活躍が次第に見られるようになるのも、重要な点である。女性会員の数も少しずつである

が増え、会の役員になるものや展示会の出展者として活動するものや論文発表を行うものも見られるようになる。

(8)協会のさまざまな活動を通じて、会の調査研究活動や展示・発表活動を主導する少数の会員と、年一回の総会や隔月の例会には参加するが著作活動などには至らない多数の会員との差が見られる。この現象は、上述のレスター大学イギリス郷土史学科の修了生の動向と似た傾向にあり、地域史研究の方法や叙述のあり方との関係の問題に一つの解答を示唆するものであろう。すなわち、地域史叙述は、たんに地域史の専門家集団だけを読者として想定しているのではなく、地域史に関してある程度の興味と素養をもつ多数の読者の郷土史家向けであること。したがって、レスター大学イギリス郷土史学科のように、この読者の郷土史家の有り様を変えることが地域史叙述そのものの再考につながることで、である。

(9)これまでの歴史方法論に関する議論では、もっぱら歴史を研究・叙述する歴史家を対象とするものが主であって、本研究のような必ずしも叙述を積極的に残さなかった人々の存在とその意義に着目し、その点から方法論の再考を試みるものは、管見の限り、存在しなかった。その意味で、本研究は新たな視点からの研究成果を提供することで、この分野での今後の実り多き研究の先鞭を多少なりとも付けられたものと思う。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1件)

①石井 健、大学における郷土史家の養成：レスター大学イギリス郷土史学科の場合、北海道教育大学紀要 人文科学・社会科学編、査読無、第65巻、2014、43-57

DOI : <http://s-ir.sap.hokkyodai.ac.jp/dspace/handle/123456789/7571>

〔学会発表〕(計 1件)

①石井 健、地域史とレスター学派：レスター大学イギリス地方史学科の活動を中心に、比較地域史研究会、2012年10月21日発表、一橋大学(東京都・国立市)

〔図書〕(計 0件)

〔産業財産権〕

○出願状況(計 0件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

石井 健 (ISHII, Takeshi)

北海道教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：3 0 3 0 3 0 4 3

(2)研究分担者

()

研究者番号：

(3)連携研究者

()

研究者番号：

(4)研究協力者

土肥 恒之 (DOI, Tsuneyuki)

渡邊 昭子 (WATANABE, Akiko)

青木 恭子 (AOKI, Kyoko)

森永 貴子 (MORINAGA, Takako)

高橋 暁生 (TAKAHASHI, Akio)

森 宜人

岩崎 周一 (IWASAKI, Shuichi)

永山(柳沢) のどか (NAGAYAMA

(YANAGISAWA), Nodoka)

石橋 悠人 (ISHIBASHI, Yuto)

志田 達彦 (SHIDA, Tatsuhiko)

松本 礼子 (Matsumoto, Reiko)